吉井勇論（Ⅰ）　第一章　家系　その一

鷺　只雄

はじめに

私はこれまでに吉井勇について二つの拙稿（吉井勇『酒ほがひ』［明43・9・7　昴発行所］に全注釈と解説を施した拙著［明治書院・近刊予定］及び「吉井勇論序説――初期習作と家系をめぐって――」［平8・3・14「国文学論考」32号都留文科大学国文学会］参照）を書いただけの、短歌にも、勇にも全くの門外漢であるが、その素人の気楽さから率直に言わせてもらうと、吉井勇の研究は非常に遅れていて、伝記の面でも作品研究の面でも基礎的、基本的な調査さえ行われていないのが現状である。勇の第一歌集『酒ほがひ』に全注釈を施す仕事をしてみて、そのことが肌身にしみてわかると同時に大いに困惑した。家系や伝記について信頼すべき調査は殆どなされておらず、勇の回想に従っているのが実情で、そのため回想には思い違いや齟齬が多く、それが何時のことなのか、それが本当なのかどうか、判断できない事態に遭遇することになったからである。

また作品についても同様で、作品の初出調査もごく一部になされたのみで、永く放置されたままであった。

そうした状況からの前進をめざして前掲の拙稿では資料の新たな発掘と調査とを試みた。これに対して早速、歌人で短歌史研究の重鎮である篠弘氏が「東京新聞」の「短歌月評」（平9・1・5　2面）で、

子規・左千夫・茂吉をはじめとする根岸短歌会にたいして、新詩社の「明星」派の歌人研究が遅れている。夭折した啄木ぐらいではないか。『白秋全集』が完結した白秋もむしろこれからである。鷺只雄「吉井勇論序説―初期習作と家系をめぐって」（都留文科大学「国文学論考」32号）といった研究が、ようやく出現してきた。

として、紹介して下さったのは望外の幸であった。もっぱら二十世紀の小説を研究対象としてきた私にとってはこれは大きな励ましであり、稿を続ける上での支えとなったからで、氏のご厚情にあらためて感謝しておきたい。

前稿にも記したように、吉井家の家系――特に祖父友実についての膨大な資料と父幸蔵についての資料については既にマイクロフィルム化して入手してあり、目下解読・整理中であるが、B4判で恐らく一万枚を越すと思われる分量であり、書類・書簡の年月日決定・更に殆どが達筆な毛筆で書かれていてその判読に時間がかかるなど困難な問題が山積しているため、それら全てが解決してから発表ということになると、いつのことになるかわからないので、とりあえず、祖父友実の日記を整理要約して彼の生涯の行実を明らかにした上で、周辺の事実を積み重ねていくことにしたい。

祖父友実から始めるのには、幕末まで「薩摩藩の軽輩」（吉井シヅ子〔勇の母〕「私は百二歳・一世紀を生きてきて」昭和42・3「文芸春秋」　引用は山崎朋子編『女の生き方40選　上』平7・4・10　文春文庫　による）であった吉井家を友実が、西郷隆盛や大久保利通と共に国事に奔走して大いに家名をあげた中興の祖であるからで、彼は明治天皇の信任厚く、伯爵となり、元老院議官・日本鉄道会社社長・宮内次官・枢密顧問官などを歴任した（一八二一年生まれ～九一年没）。

また、友実は勇の言によれば「歌の師」（「解説」昭27・7・25『吉井勇歌集』　岩波文庫）でもあるからで、実際残された資料からみても、友実は自由に歌を作り、知友と歌会を催し、絵を描き、歌日記や紀行文をものするなど、殺伐無風流な薩摩隼人とは大いに趣を異にし、風流韻事を楽しむ風雅の士でもあったことを証しているからで、その点からも友実の究明は重要であるが、その点については前掲の拙稿でふれたのでここでは繰り返さない。

ここで友実の日記というのは宮内庁書陵部蔵『三峰日記』のことで、一から七まで全七冊あり、明治2年2月26日（本文を除いて題簽類は「自明治二年五月」と記すが、これは臨時帝室編修局で大正一一年一一月に吉井家から借用して転写した際に誤記したものと思われる。というのは本文は「明治二年二月二六日」から記述されているからである）から明治21年1月10日まで記されている。無論、途中の脱落も多い。

先程もふれたようにこれは原本ではなく、毛筆による転写本なので体裁については簡単にふれておくと、和綴じの冊子本で、タテ27・3センチ、ヨコ20センチ、タテ罫一頁10行。第一巻の本文記載頁数は一三七であるが、これは巻によって多少の異動がある。参考までに記すと、日記の本文記載頁数は次の通り。

一――一三七頁（明2・2～5・5）
二――一五二頁（同7・3～7・12）
三――一五九頁（同12・1～12・12）
四――一六六頁（同13・1～13・11）
五――一四三頁（同14・1～14・9）
六――一八四頁（同16・1～16・12）
七――　八〇頁（同17・1～21・1）

繰り返して言うが、以下の日記の記述は「三峰日記」の翻刻ではなく、私が必要と思われる部分を取捨選択の上、それを整理し、要約したものである。原文を一、二例示する。

明治二年二月二六日
中将公前浜御乗船正午御出帆同二八日夜十二字大坂川口へ御着船
同二九日御上陸本願寺へ御宿陣相成ル
岩倉卿御在坂ニ付淀橋御上リ場ヨリ直ニ御使者被仰付
長州侯ニハ二六七日頃御上京相成候由承ル

永山源蔵へ公用人被仰付候御書付相渡ス岩倉卿へ二ケ條之御趣意
申上云々ノ御返答アリ
三岡八郎会計方被免長岡左京御召捕相成タル由
函館千人計決死其外瓦解ノ勢ニ候由
東京奥羽之間平穏
攘夷家盛ニ成立有志会ナド有之候由
木戸未タ帰京無之広沢病気ノ由

同年三月五日
林良輔野村右中建白書持参今晩入御覧候所願クハ両藩御寵遇之願意列藩へ推及一視同仁之
叡慮貫徹仕候様之御趣意書加へ方御沙汰有之

原文は右のような漢文訓読体・漢文体・候文体などの混淆した独得の文体で書かれており、また、日記であるために人物の説明などがなく、しばしばイキナリ固有名詞が登場するために理解に困難な部分もある。以下に本稿の日記を記述するに当たっての凡例を示しておく。

凡例

1 原文の趣を出来るだけ尊重して文語調を模したが、表記は新字、新仮名とした。但し、詞書、和歌などについては原文通り旧仮名とし、その他の場合についてはそのつどことわった。
2 友実の行実を主としたために、それからズレルものについてはカットしてあることをおことわりしておきたい。ただし、固有名詞についてはできるだけ拾い上げることにした。
3 外国の地名の表記で確認できるものについては、可能な限り今日の表記に改めた。同じく外国の人名については確定しがたいものが多いので原文の表記のままとした。
4 誤記・誤脱と思われるものについては改めた。
5 時刻表示は1～24時制とした。
6 （ ）内の記述はことわりがない限り、鷺の付した注である。
7 判読不能の文字については?を付した。
8 以上がそのあらましであるが、これ以上の件についてはそのつどことわった。

一

明治二（1869）年

2月26日　主上、正午に船で出帆するのに同行。

28日　夜12時大阪川口着。
29日　上陸して本願寺に御宿泊。
3月3日　参内して天杯を頂戴する。
8日　今日軍務官判事辞職願を出す。
5月22日　弾正大忠に任じられる。
6月23日　政体変革についての御下問がある。
7月12日　贋金の問題につき外国と高輪応接所において談判、出席者は右大臣三条実美、副島種臣参議、その他大蔵省、外務省の係員が出席し首尾よく談判が調う。この頃岩倉、徳大寺などが出仕しないため混雑きわまりなし。
8月19日　東京府へ出向の大木民平参事などに面会し、窮民救済の件につき尋問するも聞くに堪えざること多し。
8月20日　小御所へ赴き、例の通り会議終了後、窮民の状況切迫せるにつき、御前にて、供御を減らし、職員一同の月給を減じて御救済にあたられるべきことを建言する。
22日　上田領にて百姓一揆起こるとの注進あり。長崎表にて、耶蘇宗起こるとの注進あるにつき、太政官に連絡すべき旨渡辺大忠から相談を受ける。
26日　参内し大広間で、供御を減らし、窮民を救済する詔書を拝聴する。続いて三条右大臣より職員の俸給五分の一を返上し、救済に振り向ける提案がなされ、一同賛成し、大蔵省、東京府へ月々三千石ずつ渡すことに決まる。この日、弾正少弼に任じられる。
9月4日　主上の伊勢御遙拝につき、内侍所廊下に詰める。
7日　集議院において贋金問題につき、御下問あるため、徳大寺大納言、大久保参議等と出席する。
9日　大村兵部大輔の変事を西京から知らせてくる。
14日　オーストリア国との仮条約の件につき、高輪応接所へ赴く。
19日　渡辺大忠、長崎へ出発。
20日　正五位となる。
22日　天長節にて、酒肴を賜る。
27日　集議院へ主上の往還に、前駆をつとめる。
11月1日　中宮より吹上茶屋にて酒肴を賜る。
2日　岩倉卿、広沢等と横須賀製鉄所見学に赴く。
11日　碁会を催す。
18日　忠義公が旅館へ来訪につき、柿、蜜柑を進上する。
21日　岩倉公へ忠義公来訪につき、三条公、大久保と共に参上する。
22日　安岡、山田を訪ねる。安岡、大忠に転任、今神田邸へ参上。
24日　新嘗祭の遙拝につき出席。今日十時、忠義公ご出発。
25日　井上聞太来訪。長州藩中に京阪攘夷の説あり、弾正台がこれに応ずるとの噂あり。また、井上から今年の歳入は、百四拾七万七千九百石、歳出は九拾四万六千石余、差し引き五拾三万千九百石と聞く。
26日　休暇、囲碁。
27日　盛岡藩の順逆を誤りし件につき、按察府判官渡辺清左衛門より事情を聞く。
28日　青木大巡察を南部表へ派遣する事決定。

29日　12時頃より兵部省焼失。

30日　中路氏より来簡、白雲日記を贈られる。

伊丹より梅花に添へて歌あり、

君が世は賤が軒端に咲く梅の

うすき色香も時得顔なる

12月1日　伊丹へ返歌、

君が世も己が世も同じ霜雪の

うちにも咲ける梅が色香か

不参。

5日　大久保参議帰藩につき今夜神田邸に川村、伊集院等と会す。

7日　宮中に詰める。主な議題は

1支那朝鮮への使節の件

2ロシアと蝦夷地につきどのような約束があるのかについてアメリカよりの問い合わせの件

3耶蘇の手続きの件、

など。

9日　宮中に詰める。長崎より耶蘇の件につき大属二名報告のため上京の連絡あり。

10日　渡辺、松方へ手紙を出す。同じく鮫島へも出す。

11日　休暇。寺島、川村等来訪。黒柳等、碁会。

14日　副島氏を訪ねる。大久保も来る。浦上耶蘇の門徒八百人乗船の準備完了の連絡あり。イギリス公使大いに立腹との由。

16日　休暇。渡辺大忠より来簡。米沢藩の大滝今日より来泊。

17日　命により八時に参内する。浦上のキリシタンの一件なり。すでに浦上一村のものは残らず移したとの知らせがあり、しばらくフランスの神父の往来を禁止するとの談判に及ぶべしとの結論に達し、12時に帰宅。明日各国公使と談判につき13時までに高輪応接所に出席せよとの連絡あり。大久保、黒田、明日出発につき今夜大久保宅を訪ね、杯を交わす。

18日　13時に高輪応接所へ着く。三条右大臣、岩倉大納言、副島参議、沢外務卿、寺島大輔、土方中弁、江藤中弁等が出席。外国はイギリス、フランス、アメリカ等の四カ国。14時前から始まり、18時前に終わる。外国の言い分は、宣教師の望むままに、キリスト教を日本人に布教できるように条約を取り決めたいとのことである。

19日　今夕、酉の刻から内侍所で安岡とお神楽を勤める。今日イギリス公使が岩倉卿に面会したいとの申し出があった由、浦上キリシタンのことと思われる。安岡、山田、河野等と参内し、民部、大蔵、合併の件並びに兵部省費用の件につき議論する。

20日　渡辺大忠昨日帰京、参内。松方も参内。

21日　松方と寺島へ行く。宇和島老公、宮本も来合わせ、キリシタン条約の件につき批評あり。

22日　今日、諸省の者参内し、浦上キリシタンの件につき討議し、フランスの宣教師を退去させ、以後キリシタンの者は相当の罪を着せるべしとの結論に達する。

23日　賞典、官禄、共に返納の願いを差し出す。弁官等遊蕩の

噂あるにつき、安岡大忠とと共に右大臣殿、岩倉殿へ申し出る。

24日　西京弾台より、大村兵部大輔暗殺の罪人の死刑を中止するの連絡あり。

27日　宮中に詰める。吉井藩、狭山藩、（北条）藩籍返上の申し出再度に及び免ぜられる。今夜、通町より築地にかけて大火。

28日　本日より休暇。

明治三（1870）年

1月1日　参内し、奏任官以上拝賀。歌一首。

大御代の光にそひて限りなき
春うららかにたちにけるかな

4日　仕事始めで弾正台に出仕し、祝酒と扇子（仙人竹に菊の絵）を拝領。歌一首。

立春
大御代の光と共に朝日さす
はまとの森に春たちにけり

寺島焼失につき慰問。

5日　宮中に詰める。年頭の儀式中に武事に関するもの一つもなきは如何かと思い、右大臣に言上。至極尤ものことととてそのむね係りの者に連絡される。

8日　右大臣邸からのお召しにつき、夕刻参上する。岩倉殿、安岡大忠も参会し、西京弾台の件につきお尋ねあり。尚武の件、安岡と共にしきりに言上する。

9日　岩倉殿のお召しにより参上、海江田の一件なり。横浜へ馬車にて、沢外務卿、寺島大輔と赴き、イギリス公使館で英、仏、米、孛（プロイセンのこと）の公使と、キリシタンの件につき15時から18時まで談判する。宣教師の取り締まりについては外人居留地外で説法、礼拝など行った場合には公使の権限で日本から退去させること。日本でこのたび浦上のキリシタンを移動させた件については悉くもとへもどすべしとの要求などあり。これに対し、返答は政府へ相談する間猶予を求め、前文の次第を文書にして交換したい旨申し入れたところ、四人の公使はいずれも承諾、文書を受領。

10日　12時から孛漏生（プロイセン）公使より食事の招待を受け、15時過ぎに横浜を発車し、19時に帰京。

11日　品川県へ昨夜百姓ども押し掛け混雑したとの報告あり。田中清之進から、後藤栄之丞の件を聞く、また贋金の件についても話あり。副島を訪問し、大久保から手紙が来て上国の人心が不穏で、大蔵省は信を失った旨の報告あり。

18日　西京府知事と松田大参事を糾弾する。

20日　門脇、海江田を糾弾の事。渡辺大忠から来簡。

21日　神田邸に行き、海江田と会う。松方より来信、長崎は静謐の由。

23日　再び海江田、門脇を糾問。常陸竜ヶ崎の分銅金を手配。水戸云々の探索を大弼より命じられる。

27日　宮内省からの春来日暖の勅題に応じて詠進した歌、
　　??ふにふみゆきもがなと思うまで
　　はるあたたかになりにけるかな

2月2日　岩倉家よりのお召しにより参上し、江藤の件につきお尋ねあり。のち、囲碁。

3日　南部民一郎の出発に際し、備中次吉作の短刀一振りを贈る。

4日　河野、深沢、南部等西京へ出発する。孛漏生公使と築地運上所で面会する。副島、安岡、吉岡等と会い、帰路副島同伴にて寺島宅へ寄る。

5日　勘作西京より帰る。大久保が長州藩から出した手紙来る。

6日　川村がきて長州藩の諸隊が混雑しているとの報告あり。副島を訪問し、大蔵、民部変革のことを聞く。井上聞太上京の由。

7日　海江田、門脇、口書を提出する。村田平右衛門本日長州へ赴任するとのことで来訪。山口藩から混雑の届けあり。薩摩兵一大隊兵庫へ出張の命令が下る。佐々木、参議に転じる。岩倉卿の御訪問あり、副島も来る、山口藩へ勅使派遣のこと及び草莽御所をおくのは不適当であることを申し上げる。

10日　不参。副島が不平の旨を述べてきたので、夜訪ねる。

12日　徳大寺大納言殿、山口藩へ宣撫使として派遣されるのに同道を命じられる。歌一首、
　　大君のみことかしこみ周防なる
　　荒きその道越えんとぞ思ふ

15日　徳大寺公へ参上する。土方中弁も来る。

16日　広沢を訪問する。夜、副島を訪問する。伊集院等来る。

17日　三条右大臣殿と岩倉殿へ兵制につき申し上げる。主上がおいおい兵権を掌握なさりたき件については、孫子の道を学び、調練などを天覧なさるべきことを申し上げる。

18日　今朝、長州出張で10時に出発のところ、風が強いため延期。副島、佐々木両参議見送りに来訪。

19日　正午、品川から船で出発。

21日　朝2時、兵庫に着き、直ちに税所に面会する。

22日　山口藩佐久間正之助兵庫港に滞在中につき来訪。大阪に百姓一揆の噂があるので阿部少巡察を派遣する。

23日　阿部少巡察異常なしと報告。

25日　網三カ別荘に徳大寺公始め諸士と囲碁、狂歌等で遊ぶ。徳大寺公が、
　　夕霞かすみこめたり海原や
　　とありければとりあへず下の句を付ける
　　紀路も淡路も見えんばかりに

26日　12時出帆。

28日　12時防州三田尻に到着。知事より使者あり。木戸も来訪、今度の事件につき逐一報告。宍戸親基来訪。

29日　8時三田尻を出発し、15時山口到着。

30日　徳大寺公の本営へ出頭する。知事から今般の次第について説明があり、末藩一同も来会して面会。杉孫七郎へ面会隊卒千三百人余は寛大に処分したき旨申し入れ、後刻協議の結果、明日、一人半口を与え、直ちに許し返すと

決定。

3日　8時、山口を出発し、夜三田尻に到着。

4日　三田尻出帆、故障により徳山着。

5日　未明出帆。

6日　12時、兵庫に着き、税所に一泊。

7日　飛脚船オレコニヤン号に乗り換え、18時出帆。幸蔵、長八両人を連れ、他は皆別の船に乗る。

9日　朝6時横浜到着。15時帰宅。

10日　参内。御学問所にて防長の事情について奏上。

11日　川村兵部大丞と向島を散歩する。桜花満開、酔人多し。

12日　篠原、池上等帰国するにつき餞別を贈る。今日大久保参議帰京につき訪ね、鹿児島の事情を具に聞く。黒田先に帰る。

16日　徳大寺殿、宇和島公、越前春嶽公、宮内卿、万里小路殿等と英国軍艦を訪問する。

17日　御？　一疋
金　二万疋
右は長州出張について下賜されたもの。山田少忠が辞表を出したと聞き、訪ねて慰留する。得能良介、大久保と共に出府し、今朝来る。

18日　右大臣殿邸にて納言、参議の会議あり、その模様を、夜大久保を訪ねて聞く。山田少忠から返書が来る。

21日　渋谷の黒田邸を訪ねる。

23日　広沢参議帰国に際し、主上に拝顔。夜、副島に行き鉄道を奥州路に引く論を述べる。

24日　広沢出発。川村横浜からの帰途に立ち寄る。伊集院は参政不承知のため陸路出立するという。

26日　右大臣殿邸での納言、参議の会議後、岩倉公、徳大寺公、副島、大久保等来宅、囲碁。交代の兵隊、御国より到着。弾例一條につき謹慎のお達しあり。（4月17日まで謹慎。）

28日　4月18日　謹慎許される。丸山、谷元等樺太より帰り、来訪した谷から彼の地の事情を具に聞く。

19日　民部少輔兼大蔵少輔に任じられる。

20日　副島、大隈、大久保、得能等を招待する。

22日　南部、庄内等献金免除の評議のため大少輔ご用につき、大隈、伊藤、三人同道して参内。黒田少弼へ事務引継の書類を渡す。野津、大山来る。夜、大久保、川村来る。

23日　橋場鋳銭所から浅草御倉へ見聞に出かける。

5月15日　招魂祭につき参拝。大久保と神田邸へ行く。

16日　中村半次郎の一大隊が帰藩。その船に長男幸蔵を乗せる。今年は先考の三回忌、北堂の十三回忌に当たるからである。

7月1日　岩倉公からお召しがあり、民部、大蔵両省の状況につき御下問。坂本龍馬、石河静之助の跡目の件、水戸藩人登用の件等も申し上げる。

2日　大隈より大久保に、民部省改革の件、如何様にも決定すべきことを申し入れてくれとの依頼を受ける。

3日　大久保を訪ね、前日の件相談する。大久保は木戸にも話しておくとのこと。

10日　民部、大蔵両省引き分けとなり、大蔵少輔兼民部少輔免官。
14日　大木大輔と横浜へ行き、英仏両公使と面会す。灯台局へ行き、ブラントンに面会。
16日　仏、孛両国の兵隊横浜で戦争に及んだという。
11月25日　願いにより、民部大丞に転任。
12月24日　信州に一揆が起こり、出張の命を受ける。出張者は福原権少丞、竹田庶務少佑、関口大令史等。
26日　12時に出発し、板橋宿にて休憩し、蕨宿に泊まる。佐賀藩の徴兵一大隊出発する。
27日　8時出発し、天神橋にて昼食。14時過ぎ、桶川に到着し、泊まる。
28日　8時桶川出発。途中、窮民多し。熊谷泊。
31日　岩鼻泊。

明治四（1871）年

1月1日　高崎泊。
8日　松代着。一揆は既に鎮定。
21日　本日まで松代に滞在。
22日　松代を出発し、地蔵峠を越え、小諸に出て、26日帰京。
5月24日　大阪、兵庫地区暴風雨激浪のため人家が破壊され、死亡者多数との連絡があり、直ちに出張を命じられる。
25日　早朝馬車で横浜に向かい、昼食後暫時休憩し、飛脚船に乗る。
27日　朝、兵庫着。6月22日まで滞在し、西京、大津等を巡回する。
6月23日　船で帰路につく。
26日　朝、帰京。
27日　大久保、大蔵卿に任じられ、その他数名転任あり。なお、西郷は24日に参議に任じられた由。
7月4日　宮内大丞に任じられる。
9日　朝8時頃、暴風最も甚だしく海軍兵学校寮と六番大隊の兵舎一棟崩壊。海軍に即死一人、負傷三人、陸軍に即死一人、負傷二十人余出る。香川権大丞等に余も同道して現場に赴き、15時頃復命する。
10日　前日の暴風のための死者には金三千疋、負傷者には各金千疋を下賜。今日、戸田大丞の案内で奥向を見聞する。
12日　制度取調係を命じられる。
13日　当座の御題を示され、薄をとる。
14日　駒なべていざ見にゆかむ初尾花
穂に出ぬてふ武蔵野の原
右の歌を詠進。
今日10時、鹿児島、山口両藩知事並びに土佐の板垣退助に御対面、廃藩置県の勅あり。続いて徳島、熊本、名古屋、鳥取の知事へも同じく勅あり。弁官廃止。14時、在京の諸藩残らず召集し、前条の勅あり。
15日　町田、松方等と品川へ行く。
16日　西郷南洲と大円寺に詣でる。
18日　宮内省変革の件を板垣、大隈へ申し出ておく。

19日　吹上御所の御庭並びに織物所を見聞する。奥向きの簡略の勅が7月付けで出される。

20日　省中の大少丞悉く免官。世古権大丞に任じられる。

21日　西郷、大久保、木場等と向島七草観覧旁々、散歩する。

23日　今日より初めて当番を勤める。主上に初めて直接に申し上げる、誠に恐れ多し。今夕、山里において尾州、長州、越前老公、忠義を召され、天酌。

25日　省中に侍従長、内匠司、調度司、大監、少監をおき、女官の等級も定められる。

26日　西郷、大久保と木場に遊ぶ。

28日　皇后宮陛下吹上へ行啓なさるのにお供をして、

お庭に萩の花咲きたりければ
萩の花咲きそめにけり散らぬ間に
またいでましの御供なさばや

8月1日　朝、女官全て免職。昼過ぎ、皇后宮陛下御小座敷へご出席になり、万里小路殿の取り次ぎで典侍以下拝命。中には等級を下げられた人もあり、総子と言える人などは泣き出したり。呼び出しは世古権大丞。判任官の命婦、権命婦には、私から辞令を渡す。これまで数百年来、女官が奉書などを諸大名へ出していたのを、ただ一日にしてその権限を葬ったことは誠に愉快極まりなく、いよいよ皇運隆興の時節到来と、密かに恐悦に絶えず。

6日　初めて馬車に同乗し、吹上の庭園を行幸。夕刻、滝見の茶屋にお入りになり、天酌を賜る。身に余りたることどもなり。

8日　御椅子等を購入のため横浜へ行き高島屋に泊。

9日　終日、横浜で買い物をする。

10日　写真を撮る。上野敬介、前島貢吉がイギリスから今朝到着と聞き、旅館に訪ね面会する。長男幸蔵は元気で修行中であり、幸蔵からの手紙を受け取り、14時に馬車で横浜を出て18時に帰宅。

11日　今日主上が侍従らと腕押しをし、侍従高島などは御力強しと話す。

12日　横浜で購入した椅子その他は主上のお気にいる。

15日　太政大臣に大久保一翁を君側にご採用の件申し上げる。

18日　馬車で浜殿に行幸になり、途中で行程を変更して俄に三条太政大臣邸に立ち寄られ、御靴の侭で玄関から入って暫時休憩の後直ちに浜殿へ赴く。鷹狩り、網打ちなどを楽しまれた後、延遼館に大臣以下諸省長官を招いて西洋料理を馳走。帰途、岩倉邸へ立ち寄られ夕刻御帰還。岩倉公からのご挨拶に、主上のお成り一身の栄のみならず、末代までの冥加云々とあり。

23日　明日主上が兵部省に赴き、ついで浜殿へ行幸の予定につき、その準備を進めていたところ、西郷参議が俄に鹿児島へ帰国との知らせがあり、明日の準備は野村大丞に任せて退出する。

24日　西郷の後を追い、西郷信吾と東京丸に乗り、帰国の途につく。途中暴風雨に遭うも、28日夕刻鹿児島到着、岡部に泊。以後10月17日まで滞在。

10月17日　夜、やす女、正熊等を連れて乗船し、翌日10時出帆。

21日　品川着。夜、西郷、大久保等その他税所長蔵等が来る。
11月9日　宮内少輔に任じられる。アメリカ行きの女子留学生5人宮中に召され、皇后陛下より緋縮緬1疋ずつを贈られる。
10日　岩倉殿はじめ、大久保等欧米へ使節として出発するのを西郷兄弟等と横浜まで見送り、泊。税所は県へ帰る。
11日　西洋の店を回り買い物をする。
12日　10時頃、一行が乗船。男女百人、この度の航海誠に盛況なり。停泊中の各国軍艦が祝砲を放つ。蒸気車で帰京。
14日　横須賀に行幸の件、主上よりあり。
17日　本日大嘗祭につき、種々儀式あり、帰宅は朝4時。
19日　来る21日横須賀行幸につき、本日から富小路侍従、東園侍従と出張する。
21日　主上、午後軍艦にて到着。三条大臣並びに諸省長官同伴。機械所等見学。
23日　主上、7時に東京丸に乗船、猿島に標的を設け、軍艦8艘に射撃を命じる。北風激しく、船揺れ甚だしきため、三条大臣以下侍従ら立つこと出来ぬ者多し。主上は如何にと案じるも、普段と変わりなく8時から11時まで始終をご覧になられ、16時に浜殿に到着。
26日　退庁の途中、西郷宅によると、今夜信吾帰京とのこと。
27日　本日、大奥にて大嘗会後の内祝いに出席せよとの要請あるも辞退。
ところがちょっとでもよいから顔を出せとのことで参上したところ、主上、皇后以下の皇族方、三条太政大臣、中山従二位、徳大寺、宮内卿、万里大輔、等がお席にあり。これに連なる友実一人士族の身をもってこの挙に及ぶ、真にありがたきことなり。
12月6日　西郷を訪ね、昼より小網町へ同行する。
8日　主上の寝台購入のため横浜へ赴き、10日に松方と馬車に同乗して帰京。
13日　御題の

年内梅

春きなば色もさらにや深からん
年のうちより匂ふ梅が香

20日　ドイツ人医師2名を呼び、主上の診察を依頼。
21日　裏霞ヶ関の元水野千波宅へ転居する。
22日　孛国人ケンフルマンヘール他二人来訪につき、昼食を出す。夜、副島を訪う。
24日　三条太政大臣邸に招かれ、侍従の件につき話しあり、洋食の饗応を受ける。
26日　主上が太政大臣、参議をお召しになり、金子、清国よりの献上品を下賜。大隈、板垣は参上するも西郷は風邪にて不参。

明治五（1872）年

1月1日　早朝4時から新年の儀式あり、9時過ぎ終了。

この明けくれに雪いと降りければ
暮れゆくも明くるもうれし豊かなる
年より年に積もる白雪

2日　休日。八田知紀、木場清生来る。
7日　休日。今日から、正熊入塾。
14日　夜、転居の祝宴を催す。歌
うらうらと霞ヶ関も開けけり
朝な夕なに来なけ鶯
15日　忠義公、宇和島公宅参上。東京丸にて川村の家族上京につき、見舞う。
16日　アメリカ人ケフロンを訪ね、牧畜などの話を聞く。松方と千里軒へ行く。後、孛人ペールケンフルマンを訪ねる。英米の間に難しき事情ありとのニュースを聞く。帰途寺島を訪う。
18日　歌会始の御題に詠進
風光日々新
日にそひて学びの窓も開けぬる
御代の春こそのどけかりけれ
20日　地方長官及び鎮台長官が上京の際には拝謁の機会を設定すべきことを建言する。
21日　木場、松方と西郷を訪ね、昼から浅草あたりを散歩し、帰路雉子橋由良氏の羊を見る。
22日　西郷信吾、野津七左衛門等来る。
26日　松方と黒田了介氏を訪う。頃日、薩摩から串木野夫開拓使へ呼び寄せ、大いに働き候とのことにて渋谷之花園へ行く。
27日　夜、松方を訪う。
28日　川瀬侍従長と侍従制度変革の件につき話す。

2月2日　熱があり、今日より不参。
13日　主上が竹内少侍医を派遣して病状をお尋ねになり、恐れ入る。
15日　徳大寺卿病状見舞いに来訪。
25日　本日より出勤。最近ヨーロッパから幸蔵の書簡がおいおい来るようになり、また大山弥介の手紙も来る。書面に寄れば幸蔵は英語に上達し、不自由なき由。
26日　15時頃和田倉より出火し、強風にあおられて築地本願寺、ホテル、工部省等焼失。兵部省もあやうかりしが兵隊などの尽力にて免れる。
3月3日　おやす初節句にて祝宴。西郷兄弟、野津兄弟、その他兵部省の職員等来会。
13日　文部省と大学東校へ臨幸。教師ミツフォール、ホフマンらの、生徒に質問しながらの教授法の上手さに感嘆する。
15日　近所に住むイタリア公使を訪問。畑を半分貸して植物を植えることを承諾する。夜、勝安房来る。
16日　河瀬宅で碁会があり、徳大寺卿と行く。
22日　大学南校へ行幸。
4月3日　陸軍省へ行幸。大隊長などを連れて浜殿へ赴き、酒肴を賜る。16時還幸。本日の衣服につき逆鱗あり。
7日　ドイツ公使とケンフルマンに内謁を許す。横浜より外国人の洋服屋を呼び、主上の寸法をとる。
8日　大久保一翁を訪ね、氏より自由理二冊を贈られる。
5月5日　参内。昼食後大久保を訪ねる。氏はワシントンより一旦帰国中。

7日　本日東京横浜間の鉄道開通。
16日　大久保、伊藤、由利等再び洋行につき、西郷、伊地知等と横浜まで見送り、17日10時に三人が乗船し、直ちに出帆。
19日　赤坂離宮に行幸。
20日　大久保一翁の辞表につき大木来る。夕刻、勝房州へ赴く。
21日　桂、大山等に招かれ中村楼へ行く。来会者中薩摩人多し。
22日　浜町の従三位様に暇乞いに参上。今日からおいおい荷物を積み込む。
23日　本日西国御巡幸。別に日誌あるをもってやむ。（以上「一」から）

明治七（1874）年

欧羅巴行日記（3月7日～10月28日）

海外を巡遊し、その国情を視察せんことは多年の余の素志にして、本年3月初めにこれを遂げようとするに際して佐賀の変あり、やむをえずしばらく時期の至るを待つに忽ち鎮定、かつあたかもよし、榎本武揚特命全権公使としてロシア駐在の任をおび出発するをもってこれに同行せんと俄に辞表を奉りて曰く、「友実従来欧米各国遊歴仕りたき素志に候ところ、これまで始終都合これなく、今般は是非出発仕りたく御座候間、なにとぞ当職御免仰せつけ下されたし」と正院へ願書提出。

3月7日　願いの通り免官。外務省へ出頭して御切手を申請すべき旨連絡あり。夜、伊地知正治を招いて別れの杯を汲む。余人へは誰にもこの件を告げず。
8日　宮内省へ出頭。主上より昼食に御陪食の上七百円頂戴し、更に机、墨入れ等を御自ら御注文になられる。又、皇后より拝謁の上紅白縮緬二疋拝領。丁重にお礼申し上げて退出。
9日　昼食後、横浜に赴く。伊地知正治、得能通生、山口源介、大滝新十郎、寺島、黒田等も見送りに来る。夕刻、イギリス船ビハーニ号に乗る。同行者は榎本武揚、市川文吉、山本清堅、大岡金二橋等なり。船賃はイタリーヴェニスまで中等料金で二五〇円。東洋銀行で二七〇〇円を為替に組む。他に一〇〇ドルを船中の小遣いとして持参。西郷信吾、野津七次等も横浜まで来て別れを告げたと聞く。
10日　朝、6時15分出帆。
11日　早朝、紀州大島沖を経て四国灘を航海。
12日　故郷の開聞岳を望みて過ぎる。
14日　12時頃初めて支那福州の地方を見る。
15日　福建と台湾との間を航海する。船内に横浜で六年間開店しているという支那人がいて、横浜から香港までの下等運賃は25ドル、香港から広東までは1ドルで行かれるという。
16日　16時頃から香港が見え、大変嬉しい。18時15分香港着。領事日野某船中に来たり、かつて幸蔵等と共に洋行したという。
17日　今朝から香港ホテル泊。市内見物。

18日　自宅及び大久保、伊地知、寺島、杉等へ手紙を出す。夜、北代（香港で知り合った日本人）に駿浦屋の日本料理を馳走になる。

19日　10時、ムールタント号に乗り換え、12時40分出帆。今度の船は前の船より一層大きく、部屋は大岡(金)二橋と外国人の三人なり。

20日　香港を出て百里余り、5月頃の気候なので夏着に変える。安南のあたりかと思われ、支那人のシンガポールへ売買に行く者の船が多い。

支那の海早乗りすぎて三日月を
さやむの山に見るも珍し

22日　香港を出てから、風柔らかに同じ方向に吹く。これを西洋人はトレードウィンド貿易風と名付けていると榎本が語る。この話で思い出したのは順聖公がつとに貿易を南方に開こうとなさっていたことである。

君まさば告げまし物をかくばかり
風の便りの有りてふものを

23日　海上には水の他は何も見えないが、シャム安南のあたりであろうか、昔日本人山田仁左衛門がこのあたりで武威を顕わしたとか。

我が国の功残しし山田仁が
昔思ほゆしやむの海つら

この船に乗り合わせたインド人民の有様貧弱にして哀れなれば

天皇の廣き恵みのかかりなば
靡かざらめやいんぢやの民

24日　夕刻、マレー半島の方にて電光雷鳴夕立の景色なり。

日の本はまだ如月の空なるに
夕立かかるまれの島山

25日　今朝、夜が明けて右手に島が見え、昼前よりマレー地方が見える。支那、ヨーロッパの帆前船に行き会う。この五、六日間は山も島も見なかったので大変嬉しい。潮の具合が悪く、シンガポールの造船所のあたりに船を繋ぐ。下船前にビール5本を買い、同乗の外国人に振る舞う。船着き場に子供らが群がり、ジャポン、ジャポンと呼ぶ声がうるさく、銀貨を海中に投ずると直ちに飛び込んで拾う。余も慰みに3枚投ず。上陸してヨーロッパホテルまで1里ばかりを榎本、大岡と同車して行く。夜、自宅、大久保、寺島、伊地知等へ手紙を書く。

26日　ヨーロッパホテルの近くを散歩し買い物をする途中、夕立の如き雨降り、大いに暑さを凌げり。このシンガポールは一八一八年英領に属し、貿易、海軍の権限は全くイギリスの手にあると。この近辺に虎が多く棲み、平均一日一人の割で咬殺されるという。馬車で船に帰り16時過ぎ出帆。

28日　マレー地方トスマタラ島との間を航海する。風光愛すべし。12時ペナンという所に到着。上陸し、2里半ばかりの所に滝があるというので6人ばかりで馬車に乗り、出かける。途中の風景最も愛すべく、滝に至りて各々水浴する。17時過ぎに船に戻り、18時出帆。

30日　昨日より、下痢にてボーイより丸薬をもらう。また、散薬を持ってきて鼻に嗅ぎ込む薬だと言い、言葉は通じないがその親切は顔に現れているのでチップをやる。今日マラッカ海峡を過ぎベンガル湾に出る。有名なヒマラヤの高山この奥にあるべし。

ヒマラヤの山の白雪見えぬこそ
旅路の空の恨みなりけれ

4月2日　カルカッタよりヒンドスタンのあたりであろう。世界一人口の多い土地で鉄道も四百余里開通せりと。

3日　セイロン島に着き11時に下船。港も人気も悪い所で、東洋ホテルに行き、氷菓子など食う。釈迦はこの島で誕生したという。

去りもせず来りもやらん釈迦坊の
生まれし島といふぞおかしき

寺に行き1ドルを寄付し、榎本は経文を買う。21時30分に出帆。今度の船はモルトン号といい、乗客多く、上等は70余人という。

7日　アラビア海を航海するものと思う。

8日　日本を出てから30日なり。船内のロシア人が飼う猿が逃げ出して帆柱に上り、船中興を催す。

10日　午後、アフリカの岬を南方に見る喜び甚だし。これまでの航海里程二百六十五、六英里。

12日　黎明アーデンの港に到着。上陸してホテルに休息。馬車に乗り、土地を見聞するに樹木、水、草等全くなし。土人は駱駝に乗って往来する。暑熱、塵埃等甚だしく、駝鳥の羽を売る者多し。14時出帆。

13日　今日、紅海を航行する。

14日　海上至って穏やかにして、昨日12時より二百七十五里を走る。

15日　榎本から、ヴェニス行きの荷物は名札を付け、員数を書き出し、手荷物は各自用心せよ、もし書き出さずして間違いあるともその責任は負わない旨の掲示が、今朝張り出して有ったと聞く。

17日　今朝、アフリカ、アラビアの両岸を近く見る。大変涼しく冬服に替える。13時スエズに着く。写真、小間物を売りに来、写真4枚を買う。誰も上陸する者がないので船に止まるが、蝿が多くて堪え難いほど。この辺にも草木を見ず。

18日　朝6時モルトン号を降り、8時発の汽車に乗る。運河はよほど深きものと見え、船体は見えず、ただ帆柱のみ見える。9時過ぎ一番のステーションに着き、それより19番目のアレキサンドリアに到着したのは20時20分。魯の役人二人、帯剣のエジプト人二人、馬車でステーションに出迎え、ホテルに行き食事をする。今日スコットランド人と同車し、懇篤な世話を受ける。車中、窓外の風景を見るに麦田は既に熟し、草田は青々たり。パンと肉とで命を繋ぐ国と見え、麦田、草田のみなり。村落の様子は我が国より貧窶に見え、大穴の中に住む。しかれども所々に機械見ゆ。カイロの大塔はどこにあるか分からず。モイエー、モイエーとて停車場に子供が水、ゆで卵、パ

ン、ブーデカン等を売りに来る。時に買って食べる。

（この間、明治7年4月19日〜6月17日の記事はなし。脱落か）

6月18日　川上病気につき訪問し、午後公使館に遊ぶ。

19日　天文器械所に行き、撮影する。午後、器械雛形局を見学。この局のモラン先生と副長が余のために案内をして、いろいろの仕掛けを見せてくれる。モラン氏はフランスの工業が盛大の所以は工業学校での教育にあることを力説するが、尤ものことと同感する。夕食後、清水と戯球などして遊ぶ。

20日　一人ブールバールを散歩する。ベール来訪し、明日又来るという。ギザーとチェルのエピソードの紹介あり（不和なるも互いに尊敬しあっていた話）

21日　朝ベール来る。昼、今村、川村等と公使館で話す。公使館で晩餐の馳走になる。食後、清水、兼松、川上等と玉突をする。荷物3個清水に託す。

22日　8時過ぎに川上と一緒にロールビロンを出て、ブセへ立ち寄り兼松を待って出発し、二千フランの為替を現金に換える。ベールのホテルに行き、その兄に会う。同人はマニラに12年いたと言い、この度の親子兄弟の団欒は18年ぶりという。
それから駅へ行き、11時15分発のロンドン行き列車に乗り、20時40分チャリングクロスに到着。鈴木の出迎えをうけ、馬車で公使館に入り、泊。

23日　女王からの舞踏会の招待状来る。岩元、原田と博物館、博覧会を見て17時頃帰館。夕刻、鈴木とキングスクロスに遊ぶ。この日伊地知、東郷に会う。

24日　22時よりのバッキンガム宮殿の舞踏会に行く。門で番兵に札を渡して玄関に入り、座席に着く。建物の結構雄大壮麗を極め、やがてプリンス夫妻その他皇族など入場し、その前に七、八人の先払いあり、プリンスその他直ちに舞踏を始める。食事の用意があり、そこに入って食し、1時頃帰館。2時過ぎに夜が明ける。

25日　近藤、モゴフォルドを同道して婦人科の病院、裁判所、議事院を見学。

26日　10時から近藤、モゴフォルドと一緒にロンドン奉行（市長）の官宅を訪ね、舞台、食堂、台所まで悉く見学し、13時過ぎ、食事して帰る。タイムス新聞社を見学し、その器械の巧妙なのに驚く。

27日　17時過ぎ鈴木と馬車でブライトンに行く。月美しく、海辺の眺望絶景なり。

28日　ベール来る。三宮、清水より来簡。この日雨で本野と閑話す。

29日　午後から近藤と生人形を見物し、それから晩餐、手妻師を見る。留守にベールが来たという。鮫島、大山、幸蔵に手紙を出す。

30日　イスパニアの元帥コンカが27日戦死し、サリバが跡を継いだという。朝鮮の海岸で日本船が難破して18人斬首され、朝鮮は海岸に砲台を築き、防戦の構えをなすと。日

本では議事院をいよいよ建てる由、また島津三郎が東京より帰り、西郷は東京に出て政府を助けている由聞く。（以下5月23日に横浜から投函の新聞が本日6月30日に到着したとして3頁に渡って記事の抄録あり）

7月1日　ベールが来て、明後朝から北行（ベルギー、ドイツ、フランス、スイスなどのヨーロッパ北部の旅行）の約束をする。午後から三宮に行き、蜂須賀、菊地らに面会し、日本の新聞、明六雑誌等を借りて汽車で帰る。（このあとに、国王及び内閣顧問についてのメモが5頁に渡って記載）

2日　公使館から、ある富豪の庭園開きの招待状があるとの連絡で出かけると、真に盛大な庭開きで来客夥し。それからハイドパークで休息し、17時前に帰館。夜、近藤と油絵を見に行く。

3日　ドイツ旅行のため、朝7時40分ビクトリア駅発の列車に乗る。鈴木、孛人スミス見送りに来る。同行はベール。10時頃ローバに着き、そこから船に乗り、11時40分頃カレー到着。昼食後汽車に乗り、17時頃ブリュッセルに着き、ホテルドルホテルに泊。

4日　馬車で市内を見学する。王宮、寺院、婚礼、銅像、石像、植物園、議事院等を見て、一旦ホテルに帰って昼食後再び馬車で出かける。有名な画家の家を訪ね、それからボアに行き、野外音楽会を楽しみ22時頃帰る。11時ベールの姉婿がパリから来る。

5日　ベールの姉婿今朝パリに帰る。13時頃からワーテルローに行く。距離4里、馬車代35フランク。一軒の人家があって中にナポレオン、ウェリントン両将軍の手紙、若干の軍器、銃弾の入った骨等もあり悉く見学する。道中の林間の風景すばらしく、心身爽快なり。19時帰館。

6日　早朝からゲントのラズ麻糸製造所見学に行く。汽車で2時間ばかりその敷地の広大さと機械の巧妙とは驚くべきことで、ベルギーはヨーロッパ一の小国にもかかわらずこれほどの大製造所を建設したことに感嘆する。職工二千五百人、多くは女工という。12時15分の汽車で帰る。17時過ぎの列車に乗ってベルギーをたち20時頃孛領に入り、23時頃ケルン到着。ホテルに泊。

7日　朝10時頃馬車と案内人を雇って遊覧し、見聞を3頁に渡って記す。13時頃ホテルに戻り食事を済ませて14時過ぎケルンから列車に乗り、ライン川に沿ってウィースバーデンに向かう。河畔の風光は到底筆にすることあたわず。20時頃ウィースバーデンに着き、ホテルに泊。

8日　ホテルを出て、昨日とは逆に今日はライン川を船で下る。船中諸国の男女多く、酒食を注文すれば直ちに調う。9時に出て、17時ケルン着。夜、ベールの会社の社員来る。

9日　早朝、汽車に乗り、エッセンのクルップ製造所に行く。昨日電報を打っておいたので、出迎えがありホテルに案内される。工場に行き、規模の大きさに驚く。見学の後接待所に案内され、家息始め役人10人ばかり、それに深栖も来る。更に、夕食は社長宅で饗応するとの申し出に辞退はしたが、むりやり承諾させられる。ホテルで深栖

と待っていると間もなく家息が馬車で迎えに来る。社長のクルップが玄関に出迎えるが、壮大な邸宅なり。細君も出てきて手厚く歓待され、夕食後庭園に出る。絶景なり。日暮れ前に帰館し、夜汽車でベルリンに向かう。

10日 朝ベルリン着。品川、益満、姉小路、松ケ崎、裏松、入江等来る。夜、花園動物園に行く。

11日 外務省へ行き、大臣に面会し、ホンブランの添え書きを渡す。

12日 益満、松元等と馬車で遊覧し、ビール工場を見学、食事後、戯球して帰る。

13日 品川と射的場に行く。ビスマルク撃たれるとの電報あり。

14日 品川、田辺とポツダムに行く。駅まで役人の出迎えがあり、帝の馬車に乗り、宮中に向かい食事をし、庭園遊覧、宮殿などを見学する。

15日 ベール、酒井、田坂等と一緒にスバダンの陣営に行き見学する。

16日 夕刻、列車に乗り、23時頃ライプチヒに到着。寺田がここに留学中。

17日 寺田と馬車に乗って、サルプルケンという町の近辺を遊覧する。ここはナポレオン軍がロシアから帰るのを孛軍が待ち受けて戦い、ナポレオン軍を大いに破って勝利を得た所で、石碑が建っている。夜、汽車に乗り、フランクフルトに向かう。

18日 朝フランクフルト着。馬車で紙幣製造所に行き、本間に会う。14時過ぎ、汽車に乗りメッツに向かい、深更到着、泊。このホテルは孛仏和談をした所という。

19日 馬車に乗り、山上の砲台を見学。兵隊は八千人、有事の際には三万人、山上から四方を望むと、真に欧州南北孛仏両国の要衝である。宿に帰り、休息の後、20時発の汽車でパリに向かう。

20日 朝7時パリに着き、ホテルヨーロッパに宿を取る。公使館に行き、河瀬、前田等の手紙を受け取り、本野、品川、益満、寺田、前田等へ手紙を書く。一昨18日、大山に帰朝を命じる電報があったと聞き、大山にパリに来るかどうかを電報で問い合わせる。夜、清水、兼松と会う。

21日 天文台へ行き、撮影する。写真師、器械者、清水と共に昼食をとる。天文台長に別れの挨拶をするに、台長夫人は後日日本へ赴くという。ベール、今夜からロンドンへ行く。彼の案内でダイヤモンドの細工店を見学する。

22日 大山からパリには来ない旨の返電があったため、夜川上を同道してジュネーブへ向けて出発する。朝10時過ぎジュネーブ着。大山が出迎えて、来月16日にこちらを出発するという。夜、船を湖上に浮かべる、月明らかに気清く、幽静喜ぶべし。

24日 眼鏡、時計などを買い、花園を散歩し、15時発の汽車でパリに向かう。

25日 朝6時パリ着。昼から川上とベルサイユ宮殿に赴く。名画すこぶる多く晩に帰る。

26日 兼松を訪ね、金三百フランを借りる。鮫島を養生所に訪ね別れを告げる。前田から贈られた酒だと言って出した

ので、飲んで帰る。

27日　パリを発ち、ロンドンに向かい、18時に到着。カレーの辺りで苦慮することあり。兼松が駅まで見送る。

28日　本野、鈴木、近藤と一緒にウールイッチ海軍所に行く。その盛大な様は世界に指を屈すというべし。麦を粉末にする水車の器械を見る。

29日　朝より（島名脱落）島に至る。女王も来島。

30日　海軍造船所を見る。規模広大にして勇壮なり。今24寸の鉄甲艦建造中。ネルソン提督の戦死した古艦ありて往時を偲ぶ。19時頃公使館に帰る。

31日　鈴木、蜂須賀、岩倉とオリエンタルバンクに行き、千十六ドルを為替にし、乗船切符を買う、百三十円也。

8月1日　14時頃からリッチモンドに行く、風景幽水、真に愛すべし。幸蔵の師匠、ベール、本野、鈴木、近藤等を饗応し、夜帰館する。

3日　夜、鈴木と戯球。

4日　朝10時頃からベール、本野と同車してセヒュに行き、鋼鉄製造所を見学。その広大にして且つ巧みなることに驚嘆す。そこからマンチェスターに向かい夕方着き、泊。

5日　（脱落）に至り、小道具器械、筆器械、小銃、ガラス等の機械工場を見る。皆妙工なり。夕方マンチェスターに帰り、ホテルシェフィールドに泊。

6日　1時間ばかり車をとばして羅紗製造所を見るに、これ又妙巧なり。鈴木に頼んでおいた金子、為替券を失念していたが、それを今朝受け取る。16時過ぎから市中を散歩し、筆、手帳等を買う。夜、観劇。ベールと戯球。

7日　8時30分発の汽車でリバプールに向かう。（車中の見聞として3頁の記載あり）

8日　18時、（アメリカ行の）汽船ボスニア号に乗る。ベールの斡旋によるもので、真に周到、船内まで送ってきて船長、ウェーター、部屋係り等に深く頼んでくれ、又下船の際には、銘々に1ポンド半ずつチップを与えよと教えてくれる。本野も送ってきて波止場で別れる。船は新造船で今回が初航海、19時頃リバプールを出港。夕食が出て、各国人の中に班座して食べることにも慣れる。

9日　4時頃アイルランドの港に着く。

14日　海上平和で乗船にも慣れ、船はひたすら西を目指して航海。

我が国は東にあるか西にあるか　わきまへ難し。
昨日まで日の出る方を我が国と
思ひし今日は西とこそ見れ

遠渡西洋眼界新
僉維船客異邦人
故郷連思船窓夢
渺渺煙波月一輪

15日　海上また静かで夜月を見る。

閣龍

荒波の道のり分けし古の
人の功やいで人のため
乗りいでむうちにまずしる海原の

広き心の人もありけり

17日　天気晴朗、心快然。晩にボーイ等が相撲、歌舞等いろいろの芸を演じて乗客を慰謝する。船客はチップとして一歩、余は二歩を与える。

19日　昼頃からアメリカの大地が見え、船客は皆欣然として喜ぶ。夕方ニューヨークの港外に停泊。

20日　早朝船が港内に入り、出迎えの人々が運上所に集まっており、その中に幸蔵の姿があるかと望遠鏡で探したが不明。尚も細視するとようやく見いだし、その時の喜びの気持ちはたとえようもない。また幸蔵もしきりに船中をのぞいており、こちらからハンカチをふると、気がついて飛び上がり、涙を流して喜ぶ。幸蔵の案内でブロードウェイのホテルシンクリヤハウスに行く。午後、深沢が来て夕刻まで話す。晩餐後ワシントンスクエヤーで納涼、戯球などして遊ぶ。暑さ甚だしい。

21日　領事館に赴き深沢に、面会し、手形を頼む。勝小鹿（芳州の倅）に面会する。花房に手紙を出す。

22日　北京号（太平海飛脚船）の落成につき会社から招待状を受け、朝7時から深沢と同行する。来客は千人を超え、食事が出る。船は港外に乗り出し17時頃帰港。深沢と別れて一人帰路につくが途中道に迷って困却するも、ようやく帰館。大久保彦之丞へ電報を打つが、最近帰国したとのことで会えなかったのは遺憾。

23日　朝、井上要之介来て市中を散歩する。午後、幸蔵と河畔を歩く。

24日　領事館へ行くと、26（原文24とあるが、正しく改めた）日に再度北京号試運転の招待状をもらうが、辞退する。ところが会社から大統領その他が来会する故強いて参会してほしい旨請われて、やむを得ず承諾する。本野、鈴木等より来簡。午後、井上要来て、一緒にセントパークに遊ぶ。

25日　アメリカンバンクノートカンパニーの紙幣製造所を見学。菅野覚兵衛来訪。

26日　午前8時、北京号の再度の試運転に赴く。大統領はじめ役人、富豪等数百人乗船。矢野、深沢、浅野も来る。船中音楽、立食等あり。

27日　朝、船でニューポートに行く。富豪の別荘が多く、避暑に適すと言う。馬車で遊覧する。

28日　12時、船と汽車でニューヨークに向かい、20時頃到着。矢野等が泊まっているヒフスアベニューホテルに行き、晩餐。思いがけず今日到着したというスミスに会う。

29日　領事館に行き、夕方スミスを訪ねるが不在。

30日　スミスともう一人プロイセン人が来る。彼は砲隊の士官でフランスと戦争の時に出陣し、今度日本へ渡航するという。

31日　領事館へ行き菅野に会い、金子四百円を頼む。スミス等今夕ワシントンへ出発するが、余は風邪ぎみゆえ中止。

9月1日　21時発の「ソレイン」に乗り、ワシントンに向かう。運賃9ドル半のうち2ドルは寝台料金。

2日　6時過ぎワシントン着。朝食後議事院を見学し、ホテル

に行き、12時まで眠る。午後公使館に行き矢野に面会する。この夜、幸蔵と玉投げをして遊ぶ。

3日　器械雛形を見学。ホテルに戻ると矢野が留守に訪ねてきて、一緒に昼食をしたい旨の置き手紙があるが、済ませた後なので行かず。（この後2頁分の見聞記載あり）午後、矢野を訪ね夕食の馳走になる。それから矢野と馬車に乗り花園に行き、帰りに公使館で茶を飲み、20時過ぎ帰館。

4日　10時に幸蔵と船に乗りワシントンの故郷に行く。生家はそのまま残っており墓に詣でる。野外で食事をし、17時頃帰館。

5日　（日本に関する新聞の記事1頁分記載あり）花園を散歩し、夜幸蔵と戯球、玉投げ等して遊ぶ。

6日　浅野書記来る。

7日　先日、器械雛形見学の際未見の分を見、午後、勧農寮とスミッソンの学校を見学。アメリカでは黒人と白人が互いに仲が悪く、近頃白人が密かに徒党を組んで黒人を惨殺し、その数6人に及ぶという。夕方矢野を訪ねるが不在。

8日　夜、幸蔵と観劇。

9日　矢野が来て、器械所2階の陳列品を見学。北京号の速力は18ノットと新聞にある。

10日　堅田に面会。夜、観劇。

12日　家からの手紙が来て、一同壮健という。酷暑堪え難く、夜観劇。

13日　公使館に行き、横山に会う。

14日　11時公使館に行き矢野に別れを告げる。13時発の列車でフィラデルフィアに行く。20時頃到着し、コンチネンタルホテル泊。

15日　朝、高橋来て一緒に馬車でヘーヤコントパークに行く。出発の際、ヨーロッパ人夫婦が一緒に馬車に乗せてくれないかと言うので承諾し、共に遊覧する。

16日　13時フィラデルフィアを出て、晩暮ニューヨーク着。

17日　領事館へ行く。大久保がアメリカへ来るとの新聞記事がある由。夜、堅田来る。

18日　堅田と領事館へ行く。幸蔵は風邪で家にあり。昼食後深沢、岩永と戯球し、夕方帰途に幸蔵、堅田に会う。また戯球して遊ぶ。

19日　深沢、岩永と博覧会に行き、お礼に夕食を馳走する。

20日　日曜日で寂寞。堅田とセントパークへ行き動物園を見る。夜深沢、菅野、佐藤等来る。酒を出し、カルタで遊ぶ。

21日　終日、ホテルにあって旅支度をする。白峰、名和来る。午後菅野、深沢、岩船、勝等来る。20時発の列車で帰国の途に着き、深沢が駅まで見送りに来る。列車は夜半まで川に沿って走り、月は昼のように明るく風景また珍奇。20時頃車が壊れた由にて乗り換える。

22日　朝停車場に着くと、急いでパンと茶を買い、立ったまま食べて急ぎ乗車。13時過ぎ、世界無双と評判のナイヤガラの滝に到着。昼食後馬車に乗り瀑布を見学、滝は二つあって一つはアメリカ、一つはカナダ領。滝を見る吊り

橋があって料金は1ドル。その他料金を取る場所がいくつもあり、飛泉の勇壮なる様は筆に尽くし難い。滝をバックにして幸蔵、堅田の3人で写真を撮る。料金は4両2分。お土産用に土人の作った羽毛の団扇があり、皇后に差し上げてはどうかと堅田が勧めるので5円で買う。夕方ホテルに戻り、食後親子で戯球。明日は父子東西に別れると思えば心中離別の情禁じ難し。

23日 今朝また馬車に乗って諸処を観覧する。製紙所、水車器械等見るべきものあり。11時にホテルに戻り荷物を整理し、ベールに宛てて手紙を書く。昨日から今日まで雇った御者はあちらこちら非常に親切に案内してくれたが、別れに臨んで一筆書いてくれと言うので望まれる侭に左の文章を書いて与えた。

「明治七年九月二十日余り我らここに遊びし折、この御者を雇ひしに、ここよかしこよと己さきだちて駆け回り、いと懇ろに物したり。かかる御者は各国に稀なるべし。別れに臨んで何か書き記して与へよと乞はるるまま、後来我が国の人滝見に来ぬる人のため、且つこの御者のためにもと、この両日間彼の振る舞いを書き記して与へおきぬるは、日本堅田、吉井等なり。」（原文のまま）

13時、幸蔵と別れ堅田と二人汽車に乗る。幸蔵には今日から四、五年も会えぬと思えば真に心中言うべからざる感情があるが、心弱く見せてはならぬと思い、一杯やれ、一杯やれと言って別れた。幸蔵は13時45分ニューヨーク行きの列車に乗る。

24日 朝8時シカゴに着く。荷物を確認し、別の列車に乗り変える。川には汽船などが走っていて、繁華の土地なり。

25日 11時頃オマハに着く。別の列車に乗る。

26日 天気晴朗、列車は八千尺の高地にあり、丁度秋の半ばで平原には鹿や狼等が見える。18時頃ナラミーに着き、夕食。

27日 5時頃から高地を下り、ここまで約一昼夜高原を走る。オマハからの一千里を僅か5時間余りで通過し、真に鳥の如き速さなり。両岸の景観も奇観なり。18時オグデンに着く。20分休憩し、列車を乗り換え、ソルトレークシティに行く。2時間ほどで着く。ホテル壮麗にして一泊4ドルなり。

28日 馬車を雇って見物する。15時に出発してまたオグデンに出て本線の列車に乗る。乗客が甚だ多く混雑を極め、20時発車する。

30日 サクラメントに昼頃到着し、サンフランシスコに着いたのは、20時。領事館から成田幸吉が出迎え、船に乗ってグランドホテルに泊。夜、堅田と戯球。

10月1日 シャンド氏の訪問を受け、こちらからも答礼に訪問する。

2日 シャンド氏と羅紗製造所に行く。今朝飛脚船が着き、澤太郎左衛門、末川久敬が海軍の所用で来港したので面会する。支那との関係の模様を尋ねたが、まだ大久保の談判の様子が不分明であり、両国はもっぱら戦争の準備中であるという。幸蔵の身の上を沢に頼み、ベールへの伝言を末川に頼む。勝が辞職をしたと聞く。榎本、本野、

鮫島、幸蔵に手紙を書く。博覧会を見る。

3日 澤、末川両氏暇乞いに来る。10時半ホテルを出て乗船。成田が船まで送ってくる。領事は高楼にあって帽子をふって別れる。その他波止場まで内外の見送りに来る人多し。小室某、水郡、鏡等も帰国する。12時出帆。サンフランシスコ港に台場3カ所あり。船内に一少女で和服を着た者があり、甚だ見苦しく、聞けばイギリス人の女中となり、子供の守をしているという。甚だ英語に通じていると見え、出身は信州松本という。

6日 イギリス議事院の役人が同船していていろいろ話をする。シャンドから羅紗器械の事件を聞く。昨日の12時から今日の12時まで一七二里を航行（以下距離は前日12時から当日12時までのもの）。

7日 本日の航行一七四里。

8日 長州人津川良蔵という者がシカゴへ店を出したと水郡から聞く。航行一八五里。

9日 航行一八九里。幸蔵本日ロンドンに到着したと思われる。

13日 航行一六五里。明日12時までの航行距離が何里になるかを賭けることになり、船客17人が1ドルずつを出す。余は一九六里と一九九里をとり、大いに航海の無聊を慰める。

14日 航行は二〇五里なり。

16日 順風にして航行は二一七里、サンフランシスコからここまで二四〇〇里、太平洋の半分を過ぎる。

仇はあれど我が大君のますものを
いかに烈しき山嵐かな

祇王祇女

都にて見つつしのびし春の夜の
夢も嵯峨野に覚めてけるかな

17日 天気晴朗。本日の航行二二〇里。

清少納言

心ありて小簾まく手振り比叡の山
その雪よりもさやけかりけむ

20日 経度のため（日付変更線であろう）1日欠ける。航行二二四里。ニューヨークからサンフランシスコまでの上等の汽車賃一三〇両、寝台料金20両。

頼朝

後の世の益ら健雄もならひけり
御代をば御代におきし功を

22日 航行二三四里。ジャワの人で13年間オランダに留学して帰国する人と話す。彼が言うのには、日本はよほど用心しないと危ない、アメリカ人などは親切のようだけれどなかなか油断は出来ない。今日本で大事なのは教育である。教育は知の元で、知があれば他人に圧せられることは無く、まず舎密、算術、経済、究理の四学科が要用で、次いで内外人（単に外人の意か）と婚姻するのがよろしかろうと言う。

26日 晴天。本日の航行二二三里。船内にイギリス人カンブルなる者がいて彼は世界を漫遊して至らざる所なく、今回は日本と支那に遊ぶという。英国では有名な学者で一六、

七カ国語に通じ、時に女王に伺候するという。

27日 天気快晴。航行二三五里。この状態ならば明夕横浜に到着という。鷹が小鳥を捕えて帆柱に止まったのをある人が銃でこれを撃つ。

28日 13時半北の方角に初めて陸地を見る。奥州の辺りと思われる。サンフランシスコを出てから二四、五日、渺茫として遮るものなく、一の帆影も見なかったので、船中の人は皆こぞって喜ぶ。17時富士山を望み、日本人はもちろん外国人も皆喜ぶ。19時過ぎ観音崎灯台の下を過ぎ、21時横浜入港。大砲花火各一発。22時高島屋に泊。

29日 堅田荷物を受け取りに船に行く。アメリカドルを日本円に変えると10円余ある。13時発の列車で家に帰る。伊地知正治、得能来る。

30日 夕方、寺田と新橋辺を散歩する。野津七左衛門に会うと戦争の用意の最中だという。

31日 堅田来る。昼から寺田と博物館へ行くが、閉館で入れず。奈良原に立ち寄り、しばらく話す。外務省へ行き、旅行券を返上する。寺島へ飛脚船のこと尋ねにやる。晩景、麻布の伊地知を訪う。

11月1日 畔柳、宮田を同道して品川邸へ行く。夕景、大久保、西郷を訪ねる。また得能を訪ねる途中香川に会う。

2日 精養軒で昼食後、海軍省へ行き伊集院に面会し、澤、末川への書簡を頼む。澤から伝言されてきた医師の件を報告する。その後でハーレンスミスを訪問するが不在。五代を訪ね、物産条件その他談話数刻に及ぶ。帰途ヂブスケ、東久世、小室を訪問し、晩景帰宅。

3日 天長節。西郷へ行く旨得能から連絡ある。木場、寺田を同伴して行くと馳走あり。それから右の諸氏と山王、山下辺りを散歩し赤坂に出て拙宅に招き晩餐を共にする。

4日 ドイツ公使を訪問するが、所労のため面会できず、ケンプルマンに会って長く話す。

5日 福羽が来て夜まで宮内省の話を聞く。

6日 三条殿からお召しがあり、欧州の実情について尋ねられる。清水金之介に手紙を出す。朝、大山助左衛門来る。桜井純造を訪問。午後から寺島を訪ね、朝鮮が意外に穏やかになったとの話を聞く。留守に畠山が尋ねてきた由。

7日 今日の新聞で福沢を賞めた者がある。信州松代の人高野広馬来る。主上からのお召しで14時から参内。主上に金銭一枚、絵一枚

皇后に硝子箱一個、鳥毛団扇一柄

大宮に硝子箱一個　献上する。

御前で西洋の実情を申し上げる。同席者は徳大寺、万里小路、福羽、斉藤、元田、東久世。アーレンスから晩餐に招待され、寺田と行く。

8日 高島鞆之助来る。夜、西郷信吾の嫡子30日の宮参り祝いに行く。

9日 吉田清成が渡米するので横浜まで見送りに行く。17時の列車で帰り、精養軒で晩餐、坪井、堅田に会い、堅田を同伴して帰宅する。矢野、成田、深沢、等へ手紙を出す。岩倉殿、寺島、板根から来簡。

10日　岩倉殿、サトウを訪ねる。夜、宮内省の職員の会食が精養軒であり、誘われて出席。帰途、徳大寺、福羽、堀川と大河内の家で囲碁。

11日　松平源太郎、林半七来る。午後から松方を訪ね、金子借用の話をす。

12日　大山が薩摩から帰り、彼の地の様子を聞く。西郷は元気の由にて大いに喜んだという。

13日　杉を訪ねるが不在。今朝松方から金三百円を借用。精養軒で昼食。

14日　五代と品川邸に行く。

16日　福羽、木場に行き、囲碁。岸良、和田、福羽来る。

18日　川村邸で鴨猟。大山、陸軍少将兼少輔に任じられる。精養軒で晩餐、大河内宅で玉突きをする。

19日　大山、堅田、イギリス人カンブル等と一緒に日光に赴き、夜、幸手に泊。

20日　宇都宮泊。戊辰戦争の跡を見、戦死者の墓に詣でる。

21日　昼、日光に着き、宮殿を見る。スミスというイギリス人が来ていて彼は横浜に広い庭園を所有するという。夜に入ってカンブル到着。

22日　中禅寺湖に行き、華厳の滝を見、夕刻宿の釜屋に帰る。明日帰京するのでカンブルに別れを告げる。

23日　朝6時に出発し、16時に宇都宮に到着し昼食。それから二人曳きの人力車に乗り、途中船に乗り換えるが、風が強くて船進まず。船賃は貸し切り三両三歩、うち船頭が二両二歩を取るという。

24日　朝ようやく流山に着き、そこから人力車で、松戸、千住を経て、15時過ぎに帰宅。料理人が出張していて西洋料理の晩餐。

25日　朝、大倉、（人名欠落）両人大山に面会のため来る。夜、村田巳三郎を訪う。

26日　大久保帰朝とのことで大勢横浜に出迎えに行き、24時に着港の予定。

27日　大久保の出迎えに得能と横浜へ行く。三条殿はじめ出迎えの人多し。

27日　（前日とダブっていて、別の日と思われるが、何日かは不明故そのまま記す）黒田来る。吉原、寺田と隅田川に遊ぶ。帰途、狐鰻で食事し、大河内に行く。

12月1日　松方と四谷勧農寮に行く。

3日　税所来る。

4日　カンブル等と鴨猟に行く。

6日　アーレンス、スミス、他一人を連れ、大山、川村と吹上御苑、浜殿を案内したところ外人3人は甚だ喜ぶ。

7日　板橋で大調練あり、各国公使も見学。主上、岩倉、大久保、大木等も出張し観客夥し。（以上「二」から）

明治一二（1879）年

1月1日　天気晴朗。聖上、皇后に拝賀し、次いで青山御所に赴き皇太后に拝賀。

14日　鹿児島へ帰県するにつき、聖上、皇后に別れの拝謁をし、

金六百円を賜る。有栖川宮、三条公、岩倉公に暇を告げる。岩村通俊に面会。

15日　朝出発、副島に立ち寄る。宮島、伊地知等横浜まで見送り、宮島誠一に漢詩あり。

己卯一月十五日送吉井君之薩摩

片帆風穏海雲開
此日送君何快哉
不是尋常花石使
直将聖詔起賢才

16日　15時名護屋丸に乗り16時出帆。今朝伊豆沖を航行、終日平臥。勧農局吏員橋本、岡、多田、陸軍の野崎、華族鍋島直彬等同船。

17日　20時神戸着、専崎屋に泊。山口県人光田某も同宿。

18日　8時25分発の列車で大阪に行き、今橋通り二丁目畑中喜助方に寄る。岡部与平来る。午後堺に赴き、税所に泊。

19日　税所と大高（鳥か）神社へ参詣、富岡鉄に面会する。税所の家に戻り泊。雪降り、絶景。

20日　堺天神社で食事し、税所、富岡同伴でしばらく税所方に戻り、15時発の列車で京都に行き、三条大津屋に泊。槇村に手紙を書く。

21日　朝、槇村、伊勢来る。10時から御所を拝見し、16時過ぎから大阪に向かう。途中で三礼図、歳時記を買う。熊へ10円渡す。

22日　旧暦元旦。13時から五代宅へ行き、16時から神戸へ赴くが、船の出発延引につき大阪に戻り、林善に泊。武内に面会。

23日　芝居を岡部夫婦と見る。林で別れの杯を交わし、20時過ぎ列車に乗って神戸に行き、千歳丸に乗る。

24日　2時出帆。波平らかにして船中にあるの思いなし。

26日　5時長崎港に着き、西浜町大崎屋に行き、休息。小笠原嘉左衛門に面会。17時船に乗り22時に出帆、橋本、多田ここから同船。

27日　7時熊本沖に到着するが、風雪烈しく荷物を陸揚げすることが出来ず。長崎から同船した岩男某とここで別れる。

28日　風が強く、荷物の陸揚げに困難を極め終日船にあり、ようやく18時に出帆。

29日　黎明、野間嶽の下を通りさらに開聞岳を見、心神甚だ喜ぶ。14時過ぎ前の浜に到着、岡部与平宅に立ち寄り暫時休息の後、大脇に至り泊。野津藤来る。

30日　人力車に乗り田上の伊地知宅に行き、終日歓談し勅命を伝えたところ、謹んで上京するとの返答があり大いに安堵する。晩景、岡部に来て泊。

31日　松原神社に参詣し、墓参りの後、照国神社に参詣。夕食後、野津へ行き泊。宮内省と税所留守宅へ手紙を出す。熊吉来る。

2月1日　野津からの帰途大脇へ寄る。午後岩下、伊地知来る。夜、野津、大脇来る。

2日　大脇、野津と大徳寺の墓に行き、桑畑へ立ち寄り、金3円を遣る。玉里へご機嫌伺いに参上。熊吉、渡辺千秋来る。橋本等今日出発。

3日　岩下、野津同伴で西郷の墓参りをする。田ノ浦陶器所を見物し急須三組を買う、料金は4円80銭。紡績所を見物。夜、川口、熊吉来る。

4日　立春。午後から田原へ行き、そこから西郷へ行く。酒肴のもてなしを受ける。大山氏おやす殿来られる。田上の伊地知を訪ねると松本十郎が来たという。夜野津泊。

5日　午後野津を出て大脇に立ち寄り、荒田の宅地を見る。川上助八来る。夜大滝、平山来て酒宴。逆鉾も来る。

6日　岩元清蔵、大野義助、山本等来る。夜、市中を散策。琉球から敦賀丸が着き、松田、益満が帰る。

7日　朝6時伊地知の所へ行き別れの挨拶をして9時岡部に帰る。大滝、大脇、野津、ます、しげ等来る。11時乗船し、12時に出帆、松田、益満同船。

9日　17時神戸着、益満を同道して五代に一泊する。

10日　益満は京都へ行き、夜遅く帰る。税所来る。兼元作の刀一口を5円で買う。商法会議所及び新燧社を見学。

11日　堺へ行き富岡、西京書店佐々木来る。嶋為も来る。市村に泊。

12日　夕方堺を出て、紡績器械所を見学、一反を43銭で売るという。天神に泊まり、吉田大書記官来る。

13日　沢田、嶋為等と西京へ行き小楠公の墓に詣で、平池村平池某宅に泊。河内第一の豪農といい、劉（2字欠）の大幅を見る。

14日　平池村を出て岩清水に参詣し、山崎から汽車に乗り、鳥新に泊。北野へ参詣し、中路に暫時立ち寄り、夜四条辺りを散歩し、一力亭に上がる。

15日　午前御所へ行き、長谷川に面会する。相国寺へ墓参し、それから鴨稲荷清水等へ参詣し、美濃庄で食事して14時旅館へ戻る。槇村を訪ね御所の絵図を受け取り18時40分発の列車で大阪に下る。

16日　朝、税所畑中より帰る。昼から嶋為と天王寺辺を散歩する。荷物を三菱会社に委託する。

17日　朝、笠野来る。川村がリードと大阪に着いたと聞く。造幣局でリードと面会する。笠野に三橋楼で馳走になり、税所も来る。午後川村に面会。正倉院御物の拝観を電報で申し出る。夜、吉田大書記官来る。

18日　13時発の列車で神戸に下り、乗船しようとする時に電報を受け取ったので再び大阪に戻り、畑中に泊。御物拝観の申し出は不可の返電有り。谷元来る。

19日　税所から手紙が来る。川村と堺に行き、河盛で舞を見る。リードは今日から奈良へ行く。

20日　終日堺に遊ぶ。仁徳帝陵、白鳥（百舌か）八幡に参詣。夜、古家某へ行き、また舞を見る。

21日　堺から帰り、嶋為で昼食。徂徠の書幅を昨日落したため、警察署に届け出ておいたところ早速発見した旨の連絡があったので、為助に頼んで受け取りに行ってもらう。助久の刀を見る。夜、税所来る。

22日　出帆延期。後藤へ骨董を見に行き助久の刀を買う。船、明日出帆との連絡が来る。

23日　10時税所と別れ、11時50分発の列車で神戸へ下る。車中

イギリス人と大議論に及ぶ。常磐屋に着き、昼食後楠公の社に参詣。夕方、和歌丸へ乗り組み、出帆。

25日　10時横浜到着。12時発の列車に乗り帰宅。家中元気で待ち居たり。

26日　参内し、御前に復命。夜、野津兄弟、大山等が来て会食する。

27日　本日より二日間休暇。朝益満が来て、明日琉球へ船で出帆するという。有栖川宮、三条家へ伺候し、また元老院に届けを出す。夕刻、重野、宮嶋、本田、伊地知、木場等来る。

3月1日　参内し、御陪食を命じられ、岩倉、伊藤、井上等も同席する。幸蔵、鎮武来る。松方が帰朝する。ベールから晩餐に招待されて行く。

2日　幸蔵が横浜に行く。

3日　夜、大山で節句祝い。

5日　今夜、松田に招待される。

10日　夜千坂へ本田、高崎、宮島と同行する。

11日　幸蔵、今日から熱海へ行く。

13日　副島を訪ねるが、病気、君側のことにつき談合する。

14日　兼工部少輔を拝命。工部省に出頭し井上、山尾等に面会。

16日　荻昌吉来て、君側の話有り。午後山尾へ行き、それから水交社へ行く。

17日　今朝、佐々木と有栖川宮に参上し、主上よりの節倹令につき説明申し上げる。元老院へ届けに行き、工部省、水交社へ行く。

18日　工部省へ出る。キョソネ来る。藤田が肖像を持参。夜、狐鰻で千坂の送別会を開く。五代、本阿弥来る、刀を二本頼む。

19日　岩倉公に正治の件、井上に硫黄島談合の件を言上。高島から石炭山の件を聞く。夕刻、木場、伊地知、宮嶋、松田、井上、因碩等来て囲碁。

20日　伊地知正治が横浜到着と聞き、出迎えに行くが、一足違いで東京に向かった後。宮島、三浦、重野等来る。ハーブルに時計を頼む。正治は一泊する。税所から一封来る。

21日　三条殿より晩餐に招かれ、松方、樺山も同席する。

22日　宮内省へ行き、侍補中評議の件有り。今朝、正治麻布へ移住。

23日　岩倉公、大隈等へ行く。源三郎別荘で昼食、大石内蔵助所持の石灯篭がある。

24日　岩倉公より金百円新燧社へ寄付の書類あり。工部省で節倹令の件安川に話す。麻布のスペール宅へ午餐に行く。

25日　伊地知が天皇に拝謁し、ご沙汰を被り、皇后にも拝謁。午後、リードを案内して芝居を見、井上、森等も同道する。伊集院で晩餐。今日から名保等が熱海へ行く。

28日　高島鞆之助の洋行見送りで横浜へ行く。

29日　正治、本田、宮島等来る。正治は泊まる。

30日　昼食後、正治、宮嶋、本田と向島辺へ遊歩し八百松で飲む。花三、四分開く。

玉鉾の道ゆく人の姿さへ　　正治

のどかなりけり春の夕暮れ
親雄

渡し守いざ事問はん隅田川
堤の花は咲くや咲かずや
友実

まだ咲かぬものと思ひし桜花
嬉し野森に今日見つるかな

一睡して夢覚めけるに各詩歌を作り居りければ
寝覚めして隅田の堤を見渡せば
言葉の花も早咲きにけり

晩景、帰宅。

31日　水交社へ行く。朝岩倉公に拝謁し、芳川洋行の件を申し出ておく。

（未完・以下次号）